

講 演

明治天皇と聖徳太子

黒板勝美

私は本會の御依頼によつて『明治天皇と聖徳太子』といふ題で話すことにいたしました。最近朝鮮滿洲から歸つたばかりで、何も準備をする暇を有しませず、間違つて居るところがありましたら前以て御宥しを願つて置きます。

私がこの題を撰びましたのは、本會の名稱が明治聖徳記念會と申しまして、すぐ明治天皇と聖徳太子の御二方の御事が心に浮びましたからであります。一方に於て明治天皇の御事蹟が如何にも聖徳太子の御事蹟と類似があると同時に、他方に於て聖徳太子が從來多少御蒙りになつて居る冤罪を雪いで上げたいのであります。

抑々明治天皇が維新の大事業を興され、我帝國の國威を宣揚されて、今日の如き立派な御代を築き上げられし事を考へて見ますと、今日までの日本に於ける良い方面が明治天皇によつて發揚されたと申してよいかと思ひます。以前私は東京朝日新聞紙上に、『明治天皇と列聖』といふ題で七八回に亙つて述べた事

がありますが、明治天皇は神武天皇、天智天皇、天武天皇をはじめ、えらい天皇と似通ひ給ふところが多い、中にも天皇の位には御即きにならなかつたけれど、攝政として政治に與かりたまひし聖德太子も、また明治天皇と其の御人格や御事蹟の上に於て、類似の點の多い事を觀るのであります。日本書記を繙きますと、推古天皇廿九年の條にある文句は、直ちに明治天皇の御記事として差支ないと思はるゝ文があります、今之を讀んで見ませう。

『二十九年春二月己丑朔癸巳。半夜。廐戸豐聰耳皇子命。薨于斑鳩宮。是時。諸王諸臣。及天下百姓悉。長老如失愛兒。而鹽酢之味在口不嘗。少幼者如亡慈父母。以哭泣之聲。滿于行路。乃耕夫止耜。春女不杵。皆曰。日月失輝。天地既崩。自今以後。誰恃哉。』

この文を讀むものは誰しも明治天皇崩御の際を想ひ出し奉るべく、その折二重橋前で國民が悲しみ嘆き祈禱したのと全く國民の心情は同様であります。其後の御英主天智桓武醍醐村上及び後醍醐の諸天皇崩御の際も、國民の悲歎遣る方なかりしは固より然るべきことであります、この様な記事は明治天皇の崩御に於て二たび觀るのみであります。又同じく廿九年の條のついでに、

『當此時。高麗僧惠慈。聞上宮太子薨。以大悲之。爲皇太子。請僧而設齋。仍親說經之日。誓願曰。於日本國有聖人。曰上宮豐聰耳皇子。固天攸縱。以立聖之德。生日本之國。苞貫三統。纂先聖之宏猷。恭敬三寶。救黎元之厄。是實太聖也。今太子既薨之。有何益矣。我以來年二

月五日ニ必死。因以遇ニ上宮太子於淨土。以共化ニ衆生。於是惠慈當ニ于期日ニ而之死。是以時人彼此共言。其獨非ニ上宮太子之聖。惠慈亦聖也。」

かの惠慈法師が聖德太子の薨去の翌年その御命日に於て、此の世を去つたとは、亦明治天皇の崩御後靈柩發軔に當りて自刃された乃木大將を直ちに懐ひ出さざるを得ぬのであります。惠慈が心を捧げた聖德太子と死を共にせむとしたるは、千三百年後の今日、明治天皇の御後を慕つて自刃した乃木大將の心事と、何等異つた點はありません。乃木大將の死によつて明治天皇の聖德の如何に大なるかを知るものはまた必ず惠慈法師の死によつて聖德太子の御人格と御仁徳とを推察し得るであります。

世に一派の學者がありまして聖德太子が佛教に熱心なりし結果、佛教に惑溺されし如く推測し、太子を悪く申しますものもないではありません、此點に於ては明治天皇が信教の自由を憲法に規定したまふたのと反對のやうでありますが、その迷信を退けると同時に、神祇を崇拜するに於て相一致して居ります、この事は後に申します。決して佛教に惑溺せられたのではありません、その佛教を敬へと仰せられたことは、明治天皇の信教自由と歸着するところ同じまいつて可いかと思ひます。私は先づ順序として外國文明輸入のことから述べましょう。

太子の支那文明輸入と明治天皇の歐米文明輸入とはよく類似して居ます。江戸時代にあつて僅に和蘭人により漸く傳へられし歐米文明は、よし幕末に開港となつても、猶ほ受け身の輸入文明でありました、

それを明治天皇は五ヶ條御誓文の中に廣く智識を世界に求めよと仰せられて、進んで直接に歐米各國から文明を我が國に入れられた、そして社會の大改革は實行せられ、教育をはじめ、軍事實業が新文明によつて非常に發展し、一躍して世界的位置を高めることが出来ました。然しながら外國文明には常に弊害が伴ふものであります。外國の新文明に接して一時日本人たる事を忘れるやうな誤つた人々も間々生じましたが、これによつて文明そのものを罪することは出来ません、今之を千三百年前に溯つて觀察しますと、聖德太子以前に於ては朝鮮を経て支那文明が受け身にヤット輸入されて居ました、蘇我物部二氏の如き閥族が、各々權力暴威を逞しうして居たのは、江戸幕府があつて朝廷と國民との間に障壁をなして居たのと同様でありました、此の時に聖德太子は世に出でたまうたのであります。豪族を除き、中央集權を實現するためには、餘程の決心を要したに相違ありません。是れ實に太子が文明を進んで直接支那に求められた所以であります。又欽明天皇十三年に百濟の聖明王が佛教を日本に輸入した後、これも崇拜するものと排斥するものとの兩派の生じたのであります。日本書紀などで考へて見ますと、閥族間の問題は寧ろ政權の爭奪が中心となつて居ました、太子はどうしても此の閥族を打破し以て政權を朝廷に集めねばならぬと考へられたのであります。從來歴史家は多く日本を外國から孤立したものととして觀察し、外國との關係を重く視ぬ傾きがありますが、今聖德太子の御事業についても進んで文物を求めらるゝ支那との關係を觀察せねばなりません、丁度太子の頃は、支那は後漢の後を受け分裂したる三國時代又纔かに之を統一したるかと思

ば又忽ちに五胡十六國の亂離に陥りたる晋時代や更に主として揚子長江の南北に分立して國を立てたる南北朝時代を經過して隋といふ統一的富強の大帝國の出來た時でありましたが、朝鮮に於ては神功皇后應神天皇以來我國は其の南部に於て優勝の地位を占め、兎も角朝鮮を通じて支那文明を輸入して居たが、慶尚北道に都して居た新羅はだん／＼強盛となつて遂に任那を亡ぼし、日本府も欽明天皇の時既に亡ぼされ、日本府再興はその後歷代天皇の叡慮を惱ましたまふたところであつたが、一方支那には、隋が勢力を得て我國はいよ／＼威嚇される位置に立ちしこと、幕末に於ける外國關係と多少類似してをります。此に於て、太子は國內の一致を圖るために中央集權によつて皇室の勢力を張らむとせられたので、進んで働きがけに新しい支那の文明を輸入さるゝことゝなつた、そこに明治天皇の聖徳と類似の點があるのであります。明治時代の政治や實業、軍事等一言にしていへば、留學生の力であります、歐米文明の模倣といへば語弊がありますが、明治の文物が歐米文明の模倣の如く見ゆるは、その留學生によつて實行せられたゝめである、伊藤公の如きも、最も早い留學生（長州藩から行かれたのであるが）である、一度歐米に行つて來ねば仕事が出来ぬやうに思はしめたのが、明治時代でありました、聖徳太子は實に外國に留學生を出された最初のお方でありました、高向玄理、僧旻法師などは實にその中で最も有名な人々であります。

次に聖徳太子の傳を書いたものを見ますと、太子を恰も佛の權化の如く書き立て、佛敎の弘通にのみ力を盡されたやうになつて居ますが、日本書紀などの記載によつて考へて見ても、太子は一方に於て新

文明を輸入し、佛教を採用されたと同時に、亦他方に於て神祇崇拜なる舊信仰を保存され尊重されたとを十分認めねばなりません。日本は建國以來の民族信仰即神祇崇拜をつけて來ました。ギリシア、ローマ、支那などにも、夫々民族信仰があります。日本人は常に皇室を崇拜し來つた民族で、之と應じて神祇崇拜が深く國民の信仰に入りました。凡そ新宗教が興るときは、大抵の場合に於て舊信仰を目して異端となし、之を排斥するもので、チユートン民族やスラヴ民族にもそれ／＼民族的信仰はあつたけれど、キリスト教が傳播するに及んで、皆キリスト教に歸するに至りました。ローマなどもはじめ基督教が迫害されましたが、國教といふことになる、舊信仰は異端として全く亡ぼされて了ひました、かの日韓合併以前には朝鮮は儒教國で、佛教の僧侶は穢多の如く見做されてゐましたが、合併後は佛教も一の宗教として、その管長など大分よい待遇を受くることゝなつた。餘談ではありますが、彼等僧侶は非常に之を恩とし、寺内朝鮮總督が總理大臣に榮轉の時朝鮮の人々が記念品を贈呈したが、それに加へて貰ひ度いと願つた、ところが一般の朝鮮人は矢張穢多のやうに心得て一處に加へてやらなかつたので、今回わざわざ日本へ來て、彼等だけで禮を述べたさうであります。これは朝鮮では佛教も李朝以前には盛でありますが、種々の弊害を伴つたゆゑ遂に儒教を以て佛教に代へ全く排斥されたのであります。一千三百年前に溯つて考へて見ますに、若し太子にして全然佛教に歸依され、釋迦信仰を以て以前の神祇崇拜に代へられたとしたならば、それ以後神祇崇拜は蓋し異端視せられ、日本の民族的信仰も亡んでありまじやう。かのコンスタンチン大

帝がもし舊來のローマの宗教と結び付けて、キリスト教を弘布したならば、ローマ人そのもの、精神的生命は更に長かつたらうと思はれます。猶太人が今も猶、猶太教を奉じて民族的に團結して居るのはよい例であります。太子は決して神祇崇拜を捨てられなかつたのであります。日本紀推古十五年二月の條に、推古天皇の詔勅の中に『群臣心を竭して神祇を拜すべし』といふ文句があります。これは詔勅ではありませんが勿論攝政たる太子の御考から出たのであります。然るにその詔勅の出る三年前に出來ました憲法の中には、神祇崇拜に關する文字なく、只篤く三寶を敬ふことのみを述べてあります。今明治天皇の上に於て考へますと、明治天皇が神祇を重んぜられ、國民が之を崇拜するは日本民族として既に祖先以來繼續的のものであるに係はらず、憲法にはたゞ信仰の自由とあるは餘程よく考へて見ねばなるまいと思ひます。

さて太子が日本國民の民族的信仰たる神祇崇拜をつぶさず之を獎勵せられたるは、實に我が國が永久に榮ゆる所以で、國民は一方に於て佛教なり、他の宗教なり信仰しても同時に神祇崇拜を加味することを得て居る、『神も佛もなきものか』など、言ひ、成田の不動や伏見の稻荷などに同じく現世の利益を祈るのは、神國民の信仰に神祇崇拜と佛教信仰が並行して居るためであります。神を祈るのも佛を祀るのも同様と心得て居るのであります。後に弘法傳教日蓮などがよく兩者の關係の密接なるを利用し、日本人の信仰を集めるに至つたのは、その本づくところに溯れば、どうしても聖德太子といふことになるのであります。

元來宗教は世界的のものであります。又國家と調和せねば、之を國民として信仰する譯に行きません。

尤も調和するからと言つて、必ずしも屈從するものとは言へません。

猶ほ對外問題についても少し申したいのですが、これは必ずしも外交のことばかりではありません、すべての事柄で外國に對する態度であります、勿論先進國に對し、幾分頭を下げる心持がある事は免れない所で、我國が歐米に對し、條約改正を申出た際などは、隨分苦しい位置にあつた様に思はれます。然しながら、外國文明輸入に際し、精神的に外國文明に屈服する事は大に避けねばなりません、例へば歐洲語を日本へ輸入するにも、日本語として之が穩當なる譯語をつくることは必要であります、獨逸は外國語を自國に輸入するに、人民から用ゐられやうが用ゐられまいが、新外來語に對する獨逸語を作つておるやうであります、これ獨逸人が自主的精神に富んで居ることを示すもので、國語の上に於ける獨立的態度は現在に於ても大に必要だと思ひます。今聖德太子の對外關係を見るに、中華中國など、自國を稱し、他國を四夷八蠻とか、東夷西戎南蠻北狄など、唱へて居る支那に對し、太子が小野妹子を隋に使はされたときの國書に『日出國の天子日沒國の皇帝に書を送る』といふ文句にその自主的態度が分明ります。隋の煬帝が之を見て非常に怒つたと傳へられて居りますのは事實でありませう。又山鹿素行は何によつて書いたか、その著中朝事實の中に我が國から新羅渤海王などに書を賜ふときは諸侯に賜ふ如き方法に依られたとありますことから推して、それが太子に淵源して居るといつて可いと思ひます。かく外交上に於て國威を宣揚され、決して屈從的態度を取られなかつた太子は、また實に我が國體の上に大切なるお方といはねば



なりませぬ。弘法大師の文集性靈集に桓武天皇の時遣唐使が福州に漂流したとき、唐朝では國書を持參したかどうかを尋ねたとき、日本は支那と交通するに際し、國書を持參せざるを例とすると、答へたと書いてあります。思ふに對等の國書を持參すれば、倨傲自尊の支那の感情を害し又對等以下は勿論我國の欲せざる所なればために之を用ひなかつたのではありますまいか、吾人は深く太子に感謝せねばなりません。この御精神は、國語の上にも現はれて居ります太子が支那の制度を採用されながら其の官名の讀み方を日本語に翻譯されて居る事は、友人和田英松氏の「翰苑に見えたる冠位十二階の稱呼」と題して既に發表せられたる文に詳に見えて居ります、即ち其第一階「大德」を摩卑兜吉寐即ち「マヒトキミ」と唱へし類である。以て太子の御真心を想見すべきである。今日此等の問題に就ても大に考ふべきであつて、單に政治上獨立自主を保つのみでは、まだ不十分の様に思はれます。例へば、切符に英語を入れたり、紙幣に英語を入れるなどは、考へ物であります。太子が支那の制度を輸入しながら、日本語的に讀まれたるは、また明治天皇の大御心に共鳴するところがあると思ひます、即ち明治天皇は非常に澤山和歌をお詠みになつて居ります、明治天皇の和歌は大和言葉ともいふべき雅言を御用ゐになつて居ります、新派の様なものではありません、そこに明治天皇の大御心が伺はれます。要するに太子の御事業は、明治天皇の御事業ほどの成功はなかつたが、其精神内容に至つては、何等異つた點がない。私は明治天皇を以て、歴聖の權化の如く仰ぎ奉ると同じく、明治天皇以前に於て感謝すべきお方には太子を眞先に掲げ度いのであります（完）